

ある日の昼下がり、イルク村で———ディアス

クラウドとの鍛錬を終えて、小川で汗を流し終えて……さて、着替えるかとユルトへと足を向けて、ユルトへと近付いたその時……ユルトの中から何やら神妙な様子のアルナーの声が聞こえてくる。

はっきりとその内容は聞こえないが何か小難しい内容の何かを説いているようで、一体何を話しているのだろうかユルトのすぐ側まで近づくと、セナイとアイハンの、

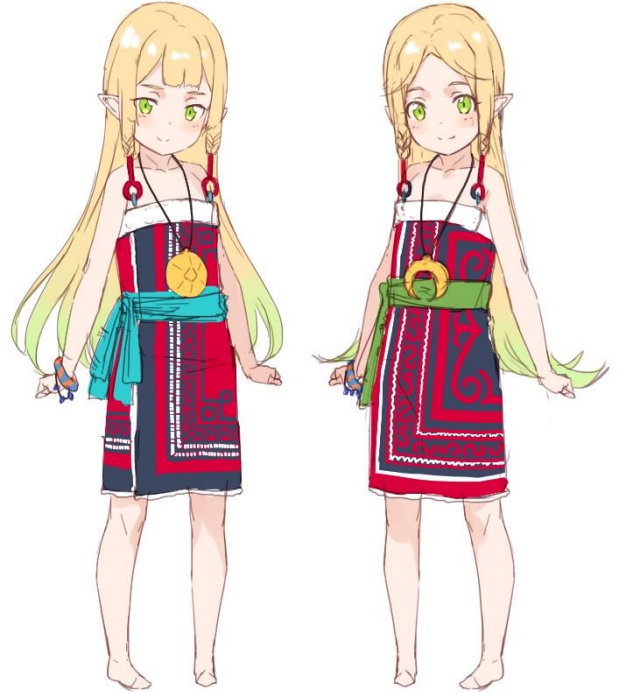
「うん、分かった！」

「わかったー」

との元気な声が聞こえてくる。

ふうーむ……？ アルナーとセナイとアイハンの3人で何か……勉強でもしているのだろうか？

そうだとすると今ユルトの中に私がずかずかと入って行ってしまったのは、勉強を中断させてしまうかもしれないな、とそこで足が止まる。



「……つまり、私とディアスの間に子が出来たら、その子はセナイとアイハンの弟妹、という事になる訳だが、その弟妹達の中で一番幼く若い子がこの家の跡継ぎになるんだ。

一番若く長い時を生きることが出来る末子を、姉兄達が支え、守ることで家を繋ぐ。

長女のセナイ、次女のアイハンは、そんな弟妹達を纏め上げる必要がある。

だからこそ更に知識をしっかりと蓄え、末子に教えるのも大事な仕事だ、分かるか？」

「うん、分かる！」

「わかるー」

……なんともまあ、とんでもない話が聞こえてきてしまった。

王国の常識だと跡継ぎは長子がするものなのだが……どうやら鬼人族の習慣ではそうではないらしい。

だが、一番長生きの末子を、知恵と力のある上の子達が守り支える……というのはある意味理にかなっているのかもしれないな。

この話に何か問題があるとするなら……一体何故アルナーがその話をセナイとアイハンにしているのか、という事だろう。

確かに私はセナイとアイハンを娘同然に想い……日々接しているが、しかしだからといって、私達の子の世話をさせる訳には……。

「じゃあじゃあ、アルナーもはやくフランソワみたいに、こども、つくってね」

普段は自分から喋ることの少ないアイハンがとんでもないことを口に出す。

「うん！ 弟欲しい、妹欲しい！ 早く早くお世話したい！」

セナイがそれに続き、無邪気で元気な声でとんでもないことを言う。

「……まあ、いつ弟妹が生まれるかはディアス次第だな。

セナイとアイハンがディアスにねだれば、ディアスも考えを改めてくれる……かもしれないな」

……そんなセナイとアイハンを嗜めることもせずに、更にアルナーまでもがとんでもないことを言い出す始末だ。

小川の水を浴びて冷えているはずの体中から、冷や汗が吹き出してきて、じっとりと全身を覆う。

……いつそユルトの中に飛び込んでこのとんでもない話の流れを断つべきか？

いや、しかし、この話の流れの中に飛び込んでしまうというのは……自滅を招いてしまうかもしれないぞ。

ど、どうしたものだろうか。

う、ううむ……戦場でもここまで判断に迷ったことは無かったのではないだろうか。

そんな折、後ろの方から人の気配がする。

この気配は……私と同じように水浴びをしてきたクラウドだろう。

……クラウドが今の私を見たら……きっと何をしているのかと声をかけてくるに違いない。

そうすると、私がここで今の話を盗み聞きしていたことがアルナー達にバレてしまう訳で……そ、それだけは避けなければ……。

私は咄嗟に後ろへと振り返り、今まさに口を開き、私に声をかけようとしてきているクラウドへと睨みを効かせて……あらん限りの殺気を飛ばす。

その殺気を受けてクラウドが一瞬怯んだのを見て……クラウドの方へと音を立てぬように飛び込んだ私はそのままクラウドを捕まえて……一気に駆け出す。

……よ、よし、とりあえず何も聞かなかったことにして、もう一度クラウドと鍛錬するとしよう。

思いっきり体を動かして、思いっきり汗をかけば……今の出来事を綺麗さっぱり忘れられるかもしれない。

……それでは何一つ解決していない気がするが……うん、まあ、他に手が無いのだから……仕方ないよな……！

